

知 能

知的優秀児の特性に関する基礎研究—生育史

○川崎省三・吉村英明（白金小）
岡田春生（国分寺第一中）

(I) 目 的

研究の主眼としては、現場の実態に基づく知的優秀児の指導法の確立であるが、まず、素質的なものを取りあげ、家庭環境、健康歴、両親の年令差などを調査し、普通児との差異、ないしは他の研究との相異を明らかにした。

(II) 方 法

昭和34年4月に東京都内の山手方面の小学校7校、中学校1校の知的優秀児171名を選び、その担任および父兄に対して行なつたアンケート調査に基づいて行なつた調査である。

(III) 結 果

知的優秀児の環境的要因としては、その家庭が文化的社会的経済的にも恵まれていること、および健康歴においても優秀児がすぐれていることが判明した。両親の年齢差や、優秀児出生時の父母の年齢などを明らかにした。

知的優秀児の基礎研究—行動傾向のタイプ

○酒井 清・白井 慎（東京都立教育研）

小学校2年生から中学校3年生までの男女の知的優秀児のPGRをとつてみるときわめて平静に推移するカーブ、きわめて動揺の著しいカーブ、その中間が約3分の1ずつみられた。この中間層を除いた両極の37名について知的作業や行動になにか特色がみられるか考察を進めた。しかし現在までのところクレペリン曲線とWISCの下位検査を結果的に比較する程度ではあまりはつきりした類型づけはできない。ただ担任教師の観察をも資料として加わえてみると、動揺の多い群にはクレペリン曲線の定型的要素の乏しいものが75%もあり消極的非社交的特徴もやや多いようである。（またWISCの下位検査と、PGR、クレペリン曲線を併せ考察するとグループによつて一定の検査が低く他の検査が高いというような傾向はみられるが、実際の作業について研究しなければ結果は判然としない。）

知的優秀児の特性に関する基礎研究

——読書生活の特徴・知能と学力の相関——

○平塚 トシ子（桃園第三小）
井 上 弘 光（武蔵野第五小）
戸 崎 厳（開進第四小）

(1) 目 的

知的優秀児の指導法を現場の実践をとおして確立するために、知的優秀児の読書生活の実態はどうか、その特徴をはつきりと把握しようとした。また、知能と学力との相関はどうかを明らかにしてみたい。

(2) 方 法

東京都内の優秀児のグループ（小学校7校、中学校1校）と、普通児のグループ（同）によつて、読書時間、読書内容、読書理由、読書歴、等の傾向を調査して比較対照し、特徴を把握する資料とした。

(3) 結果の考察

優秀児グループの方が普通児グループよりも読書時間が多く、その内容は、今読んでいる本からみても、読書歴からみても、程度が高いということが考えられるのではない。

知的優秀児の特性に関する基礎研究(第8報告)

森 重敏（東京家政大） ○外村 近（三光小）

1. 目 的

知的優秀児小学校3年～中学校2年を対象としての特性研究の一環として、かれらの興味における質的側面を、(1)読書、(2)ラジオ・テレビ、(3)ゲーム遊び、(4)切手収集、(5)話し合い活動場面をとおして普通児との比較において調査、検討する。

2. 方 法

時期は昭和34年12月（予備調査）、昭和35年8月～9月（本調査）。対象は小学校3年～6年の優秀児・普通児各15名、三光小卒の中学校1年～2年の優秀児・普通児各10名。合計50名。予備調査（面接と自由記述）で十分なものを12項目にわけて回答を求め、本調査（質問紙法）によつてその結果を検討した。

3. 結 果

読書、ラジオ・テレビ、ゲーム遊び、切手収集、話し合い活動の全領域で、優秀児は普通児よりも質的には高度で、幅も広く、処理のしかた等でもすぐれていた。その中でも、特に切手収集ではその優秀性が顕著であった。今後の課題として、活動場面におけるdynamicな特性面を追求したい。